

1. 研究の目的および方法

1.1 問題の所在

われわれ教師は授業の中で様々な問題に出会い、それを乗り越えるべく日々頭を悩ませているのではないだろうか。その問題の一つに発音の問題がある。タイ語を母語とする学習者（以下「タイ人学習者」）の日本語の発音の問題点については、これまでもたびたび指摘されてきている（シリラック 1987:88-92、助川 1993:190-192 など）。タイ人学習者の発音の「何が」問題なのかはかなり明らかになってきていると言える。

また、タイ人学習者が発音学習上どのような心理的な不安や問題点を抱えているか、あるいは教師がそれをどの程度把握しているかについても研究がなされてきている。例えば、発音矯正場面での学習者の不安について調べた小河原（2001）では「発音矯正されてもどのように直したらいいかわからない」などの「発音学習スキルの欠如」や「クラスメートに自分の発音が下手だと思われていないか気になる」などの「他者評価」などに不安を感じていることが明らかになっている（p.48）。発音指導するときに「どのような点に留意すべきか」という点も徐々に明らかになってきている。

その一方で、タイにおける発音学習の現状は、「授業で発音指導の時間を設けている」、「音声学の授業で発音指導も行っている」という機関もあるが、「発音指導に多くの時間はさけない」、「発音指導は初級の1～3回目の授業で行って終わる」といった現状も報告されている。また、その理由については「学生の人数が多いと全員の指導ができない」、「適当な教材がない」などが挙げられており、様々な原因により、必ずしも十分な発音学習・指導が行われているとは言えない（千葉 2000:50-52）。

このような現状に対してタイ人学習者が満足しているのであれば問題はないかもしれない。しかし、発音学習上の問題点について教師と学習者の意識を調査し、比較した千葉（2002）では、教師が思っている以上に学習者は「授業中発音の時間が少ない」、「ビデオやテープなどの教材がない」、「教師が一人一人の発音を直さない」ことなどに対して物足りなさを感じていることが明らかになっている（p.29-30）。

では、発音指導の方法としてはどのようなものが入り入れられているのだろうか。タイの日本語教育機関における発音指導の現状などを調査した千葉（2000）では、「体を使って音の感じを教える」、「口と舌の動きを手や絵などで示しながら発音させる」という方法が使われているのと同

時に、「大きな声ではっきりと発音するよう心がけている」、「大きい声で繰り返し発音させる」、「何回も発音してその音に慣れてもらう」といった比較的「単純なリピート」という方法も用いられていることがわかった (p. 51)。

確かに単純なリピートであれば、新出語彙の導入場面でも応用できるし、全体リピートという形をとれば、「学生の人数が多くて指導できない」という問題点にも対処できる。また、日本語母語話者に囲まれて自然な環境で日本語を耳にしている日本語学習者と違い、タイにいる学習者はふだんから母語話者の日本語を耳にする機会は比較的少ない。教室内で日本語を聞いて、模倣して発音するリピートが学習者の発音に大きく影響を与えていることも考えられる。そこで、単純なリピートが発音に対してどのような効果があるのかを調査することも有意義ではないかと考えられる。

1.2 本研究の目的および方法

本研究の目的は、単純なリピートをすることで学習者の単音の発音は向上するか、という点を明らかにすることである。なぜ単音の発音に限定するのかについては次項「2. 先行研究」で述べる。なお、本研究において「単純なリピート」とは「学習者が教師のモデル発音を聞き、教師の教示なしに模倣して言うこと」と定義する。

これらの目的のためにタイ人学習者にとって苦手と思われる発音を取り上げ、単語・文を選定し、単純なリピートの実験を行い、その結果から発音指導への提言をしたい。

2. 先行研究

発音指導におけるリピートの問題を取り上げた研究として、河野・松崎 (1998) がある。河野・松崎 (1998) では、初級学習者 5 名 (母語はポーランド語、中国語、インドネシア語など) にまず 2 つの例文を読ませ、その音声を録音した。その後、それぞれの例文についてのモデル音声を聞き、リピートし、録音するということを 5 回繰り返した。そして、録音した音声を日本語母語話者 20 名に「日本語らしさ」という観点から 7 段階で評価させた。その結果、「1 回目のリピートより 2 回目のリピートのほうがよい場合それ以上よくなることはない」、「2 回目のリピートで向上しなければ、それ以上リピートしてもよくなるならない」という 2 点が明らかになった。また、音の長短などは改善されにくい、アクセント型の正確さは改善されることもあるなど音声要素により、「直りにくさ」に差が見られた (p. 161-162)。

松崎 (2002) では、韓国語母語話者 2 名に対し、3 ヶ月間 (1 回 30 分程度、週 3～4 回) の発音指導 (「ヤマ⁽¹⁾」、「イントネーション」、「アクセント」、「音の長短・無声化」) を行い、その間に 3 回のテストとインタビューを行っている。テストでは、教師評価だけではなく、学習者の自己評価も取り入れている。その結果、「学習者の中で妥当な発音基準が形成されていない場合、モ

デル発音のリピートだけでは改善されにくい」、「学習者の自己訂正能力は、指導により向上する」、「発音についての誤った知識は自己モニターの妨げとなり、何度リピートしても直らない原因となる」という点が明らかになった (p. 38)。「自己モニター」とは学習者が自分自身の発音を、基準どおりに発音できているか適切に評価する能力であり、正しい発音をするためには非常に重要だとされている (小河原 1998 : 11)。

以上の先行研究はいずれもリピートと発音向上の問題を扱っているが、その内容はアクセントやイントネーションといった韻律に関するものであり、単音について扱った研究はまだされていないと言える。

3. 実験の概要

3.1 実験の対象とする音声

すでに述べたようにタイ人学習者の発音の問題点はかなり研究されてきている。よく知られているものに、「し」と「ち」の混同 (実際は子音[c]と[tɕ]の混同なので「しょ」と「ちょ」などの混同も起こりうる)、「つ」が「す」になってしまうという破擦音と摩擦音の問題や、ガ行がカ行のようになってしまう、ザ行がサ行のようになってしまうという有声音と無声音の問題などがある。本研究では、その中から、

①破擦音と摩擦音の問題の代表として、子音[c]と[tɕ]の問題 (以下「『し』と『ち』の問題」)、

②有声音と無声音の問題の代表として、有声音子音[z]、[dz]が無声音子音[s]に、同じく有声音子音[ʒ]、[dʒ]が無声音子音[tɕ]になってしまう問題 (以下「ザ行の問題」)

の2点を取りあげることにする。この2点については、タイ人学習者の発音の問題を扱った鈴木 (1963)、大西 (1976)、シリラック (1987)、助川 (1993) いずれにおいても指摘されているものであり、タイ人学習者にとって苦手な発音であるのは間違いない。

3.2 対象語および文の選定

対象語の選定は以下の観点から行った。まず、授業での形態を考えると、新出語を提示する場合は、教師がモデル発音を示し、学習者がそれを聞いてリピートするという形態が多いのではないだろうか。実験が実際の授業形態になるべく近いものになるよう、対象語は学習者にとって未習語を使用することとした。

次に、「し」と「ち」の問題に関してであるが、後続子音によって母音が無声化する場合としない場合がある。母音の無声化は「聞きとりの障害の中で、かなり大きな位置を占めている」(水谷 1987 : 13)。また、「無声化が生じないために、拍が長くなってリズムが乱れたり、アクセントがおかしくなったり」(松崎・河野 1998 : 171) することもある。そこで、無声化する場合としない場合に分けて考えることとした。また、ザ行の問題に関してであるが、一般的に言うとザ行の子

音が語頭にある場合は破擦音の[dz]、[dʒ]に、語中にある場合は摩擦音の[z]、[ʒ]になりやすい。このことが、難易度の差に関係する可能性も考えられるので、語頭と語中の2つに分けることとした。

そこで、サイアム大学⁽²⁾で使用している初級日本語教科書『いらっしゃいませ』⁽³⁾ およびホテル用日本語教科書・観光用日本語教科書（いずれもオリジナル教科書で未公開）の単語の中から対象となる学習者にとって未習で「し」、「ち」、ザ行の子音を含むものを選び出した。ただし、該当する語がない場合は、タイでよく使用されている『みんなの日本語』、『初級日本語』の中から、レベル的に未習であると思われる単語を選んだ。

以上の手順を踏んで選定された語をまとめたのが表1と表2である。

表1 「し」と「ち」の問題の対象語

	語頭	語中
し	<u>し</u> お（塩）	ごりょう <u>し</u> ん（御両親）
ち	<u>ち</u> リソース	もち <u>ち</u> め（もち米）
し（無声化）	<u>し</u> つもん（質問）	か <u>し</u> きり（貸切）
ち（無声化）	<u>ち</u> かてつ（地下鉄）	もち <u>ち</u> こみ（持ち込み）

表2 ザ行の問題の対象語

	語頭	語中
ざ	<u>ざ</u> んぎょう（残業）	はい <u>ざ</u> ら（灰皿）
じ	<u>じ</u> かん（時間）	は <u>じ</u> めて（初めて）
ず	<u>ず</u> ボン	み <u>ず</u> ぎ（水着）
ぜ	<u>ぜ</u> いきん（税金）	めん <u>ぜ</u> いてん（免税店）
ぞ	<u>ぞ</u> うげ（象牙）	れい <u>ぞ</u> うこ（冷蔵庫）

さらに、「語単位の練習では言えるのに、普通の会話になると発音がもとに戻ってしまう」（松崎 2001：223）ということも、われわれ教師がよく経験することではないだろうか。また、新出語の提示の後に、その語を使い文レベルでリピートをするということもよく行われることであろう。そこで、表1と表2の対象語を使った文も取り上げることとした。ただし、文の構造自体が複雑になりすぎると学習者にとって発話自体が困難だと予想されるため、文型は全て「○○○●●●ですか。」（●●●●の部分が対象語）という形に統一し、○○○の部分は未習語ではなく既習語を使用した。以下表3と表4にまとめた。

表3 「し」と「ち」の問題の文

		文
し	語頭	これは <u>し</u> おですか。(これは塩ですか。)
	語中	そちらはごりょう <u>し</u> んですか。(そちらはご両親ですか。)
ち	語頭	あまい <u>ち</u> リソースですか。(甘いチリソースですか。)
	語中	またも <u>ち</u> ごめですか。(またもち米ですか。)
し (無声化)	語頭	この <u>し</u> つもんですか。(この質問ですか。)
	語中	くるまのか <u>し</u> きりですか。(車の貸切ですか。)
ち (無声化)	語頭	こんしゅうは <u>ち</u> かてつですか。(今週は地下鉄ですか。)
	語中	おさけのも <u>ち</u> こみですか。(お酒の持ち込みですか。)

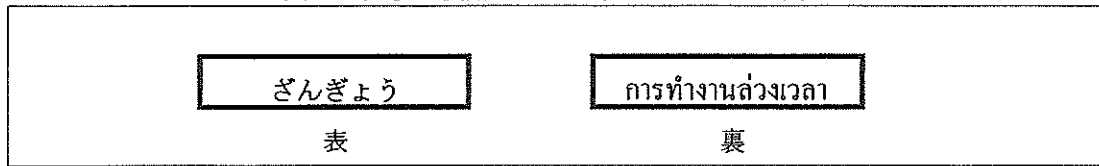
表4 ザ行の問題の文

		文
ざ	語頭	きのうの <u>ざ</u> んぎょうですか。(昨日の残業ですか。)
	語中	あれもはい <u>ざ</u> らですか。(あれも灰皿ですか。)
じ	語頭	あしたの <u>じ</u> かんですか。(明日の時間ですか。)
	語中	ここはは <u>じ</u> めてですか。(ここは初めてですか。)
ず	語頭	わたしの <u>ズ</u> ボンですか。(私のズボンですか。)
	語中	あちらのみ <u>ず</u> ぎですか。(あちらの水着ですか。)
ぜ	語頭	これも <u>ぜ</u> いきんですか。(これも税金ですか。)
	語中	くうこうのめん <u>ぜ</u> いてんですか。(空港の免税店ですか。)
ぞ	語頭	それは <u>ぞ</u> うげですか。(それは象牙ですか。)
	語中	へやのれい <u>ぞ</u> うこですか。(部屋の冷蔵庫ですか。)

3.3 実験の手順

実験は2005年1月～2月にかけて行った。サイアム大学の編入カリキュラム1年生(4年制の3年生に相当)6名および2年生4名の合計10名の協力を得て実験を行った。対象となった学習者はいずれも「日本語2」という科目を履修中で学習時間は約100時間の初級学習者である。

図1 実験に使用したフラッシュカードの例



各学習者は図1のようなフラッシュカードを見て、意味を確認してから対象語（例：「ざんぎょう」）を1回発音し、その後テープによるモデル発音を聞いて、リピートをするという手順を5回繰り返した。つまり、一語について合計6回発音したことになる。この間、実験者は一切の教示を与えない。その後、対象語を含む文（例：「きのうのざんぎょうですか」）についても同様の手順で繰り返した。この手順を対象語18語、対象文18文についても行った。つまり、36の語・文について発音したことになる。

リピート実験の終了後にはインタビュー調査も実施した。インタビュー調査では、小河原(1996)を参考に「し」と「ち」の問題、ザ行の問題に関して、聞き取る際の基準、発音する際の基準を持っているかどうか、もし持っているならどのようなものかなどを尋ねた。学習者が発音した音声およびインタビューに対する回答は全てMDに録音した。一人当たりの所要時間は約40分であった。

4. 実験の結果

4.1 判定方法

まず、2人の実験者（千葉と佐藤）が独立して、MDに録音された学習者の音声を聞き、判定した。判定結果は以下の5種類に分類された。（ ）内は例である。

- ①「正しい発音」（「し」と発音すべきときに「し」と発音しているもの）
- ②「間違った発音」（「し」と発音すべきときに「ち」と発音しているもの）
- ③「どちらともいえない発音」（「し」と発音すべきときに「し」とも「ち」ともとれるような音声を発音しているもの）
- ④「全く違う発音」（「し」と発音すべきときに「む」と発音しているもの）
- ⑤「該当する音声を発音していない」（「ごりょうしん」と発音すべきときに「ごろうん」と発音しているもの）

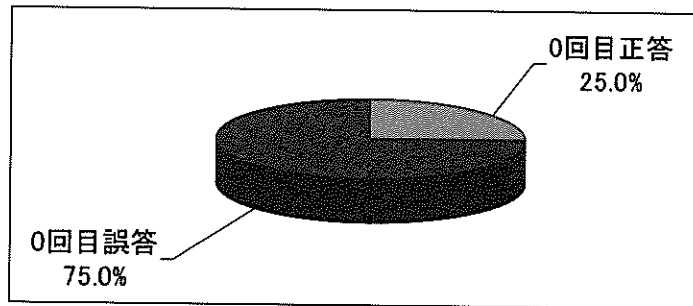
その後、2人の判定を総合し、一致して「正しい発音」と判定したもの（上記①）を「正答」、それ以外のもの（上記②③④⑤）を「誤答」とした。

4.2 リピートの回数

0回目の正答率、つまりモデル発音を聞かずに文字を読んで自分で発音した場合の正答率を表

したのが下の図2である。

図2 モデル発音を聞かないで発音した場合（0回目）の正答率



モデル発音を聞かないで正答できた語・文は360語・文（学習者1人につき36語・文×10人）中90語でちょうど25%であった。逆に、正しく発音できなかったものは360語・文中270語でちょうど75%であった。正答率が25%でしかなかったことから、やはり選定した語・文はタイ人学習者にとって発音しにくいものと言えよう。

ただ、その中でも比較的正答率が高かった語・文もあった。「これは塩ですか」（9人。正答人数。以下同じ）、「車の貸切ですか」（7人）、「そちらはご両親ですか」（7人）、「初めて」（6人）、「ここは初めてですか」（5人）、「質問」（5人）、「ご両親」（5人）、「塩」（5人）の8語・文は半分以上の学習者がモデル発音を聞かないで正しく発音できた。これらは全て「し」あるいは「じ」と発音すべき語・文である。また、「チリソース」（4人）、「甘いチリソースですか」（4人）、「もち米」（3人）など半分には満たなかったものの、「ち」と発音すべき語もあった。しかし、「ざ、ず、ぜ、ぞ」に関しては「象牙」、「税金」、「冷蔵庫」、「空港の免税店ですか」、「部屋の冷蔵庫ですか」が各1入ずつと少なかった。

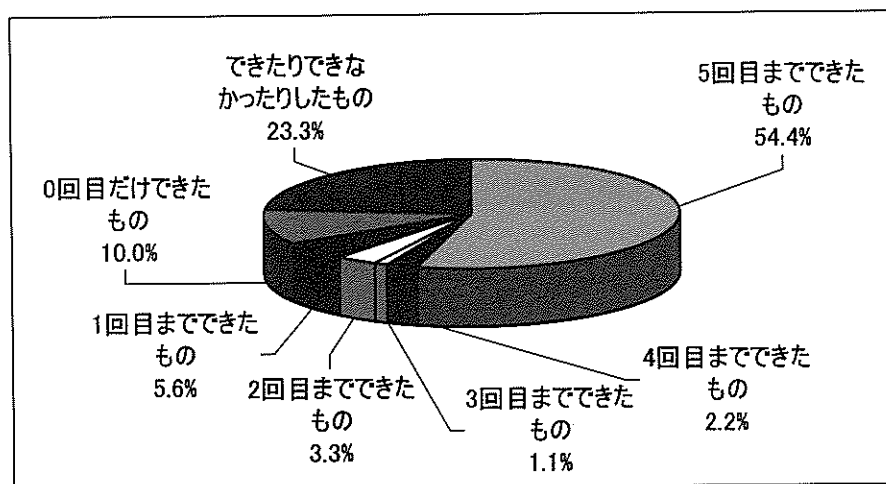
次に、0回目正答だったもの（90語・文）が、その後5回リピートをした結果、どうなったかを表したものが次ページの図3である。

0回目に文字を読んで正しく発音できたものは、半分以上の49語・文がリピートを何度繰り返してもそのまま正しく発音できた。「これは塩ですか」（8人）、「そちらはご両親ですか」（5人）、「ここは初めてですか」（4人）、「車の貸切ですか」（4人）、「ご両親」（4人）、「貸切」（4人）が比較的多かった。これも「し」と「じ」と発音すべき語・文が多かった。

その次に多かったのは、正しく発音できたりできなかったりしたものが約4分の1あった。この中には「塩」（2人）、「質問」（2人）などがあったが、特に目立ったものはなかった。また、リピートの途中からできなくなったもの（図3の「1回目までできたもの」～「4回目までできたもの」に相当）も多くはないが12.2%あった。また、自分で発音したときには正しく発音でき

たのに、モデル発音を聞いてリピートをすると正しく発音できなくなったものも10%あった。

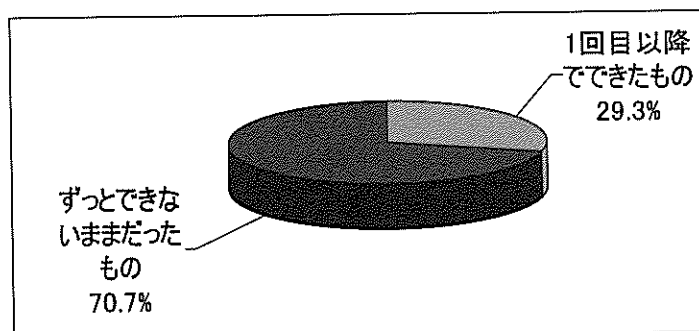
図3 0回目正答だったもののリピート後の結果



このことから、自分で文字を読んで正しく発音できる場合は何度単純なリピートを繰り返しても変わらない、つまり何度も単純なリピートをする必要性はあまりないと言えるだろう。

次に、0回目（モデル発音を聞かないで自分で文字を読んで発音した場合）誤答だったものが、その後リピートをして発音できるようになったかどうかを表したものが下の図4である。

図4 0回目誤答だったもののリピート後の結果



0回目誤答だったものは全体の75%にあたる270語・文であったが、そのうちの191語・文（70.7%）が5回モデル音を聞いてリピートしても正しく発音できるようにはならなかった。逆に、リピートをして1度でも正しく発音できたものは79語・文（29.3%）しかなかった。しかも、この中には0回目の誤答が「発音間違い」というよりは、「読み間違い」と言えるようなものもい

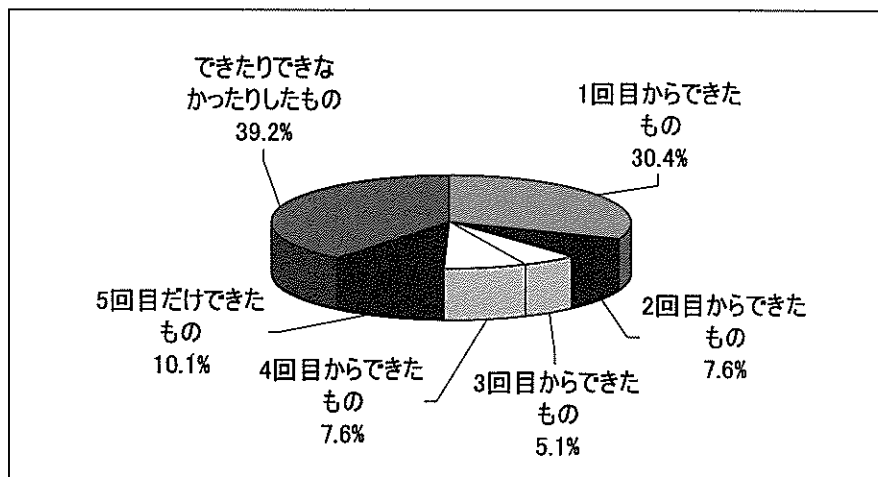
くつかあった。単純なリピートの効果は29.3%という数字よりさらに低くなると言っている。

このことから、正しく発音できない学習者に対し、何度モデル音を聞かせて単純なリピートさせてもほとんど効果がないと言えるであろう。これは小河原（1996）で、学習者が妥当な発音基準を持ち、自分自身が発音した音声はその基準に合っていると知覚される場合に発音も高く評価されることから、「教師が発音矯正をする際、単に正しいモデル発音を繰り返し、模倣させるだけでは有効ではない」（p. 21）と指摘されているのとは一致する結果である。また、松崎（2002）でも、韻律に関して「妥当な発音基準が形成されていない場合、モデル音のリピートだけでは発音は改善されにくい」という結果が出ている（p. 38）が、本実験の結果から韻律だけではなく単音でも同じことが言えそうである。

しかし、リピートして1度でも正しく発音できたものも少ないながらあった。それらに何か特徴はあるであろうか。それをまとめたのが下の図5である。

最も多かったものは正しく発音できたりできなかったりしたもので、79語・文中31語（39.2%）であった。つまり、1回目以降でできるようになったと言っても決して安定していつも正しく発音できるというほどではないものが最も多いということになる。この群の中で比較的多く見られたのは「水着」（4人）、「質問」（3人）、「ズボン」（2人）、「それは象牙ですか」（2人）などで「ず」や「ぞ」などが見られる。

図5 0回目誤答だったものでリピートをして正しく発音できたものの内訳



二番目に多かったのは1回目以降5回目まで全て正しく発音できたもので、24語・文（30.4%）あった。例えば、「ご両親」（3人）、「水着」（3人）、「灰皿」（2人）、「冷蔵庫」（2人）などがあった。しかし、24語・文の中で語が20語あったのに対し、文は4文しかなかった。長い文だとリピートして言うのが精一杯で、発音まで意識が回らないが、短い語ではリピートするのもそれ

ほど大変ではなく、発音も多少は意識されるようになり、発音できるようになった可能性がある。実際に実験終了後のインタビューでは「文を間違わないように言わなければならないと思ったので緊張した」という答えが多く見られた。

さらに、4回目あるいは5回目からできたものもあった。しかし、数はそれほど多くなく、何度も単純なリピートをさせることがそれほど発音の向上に効果があるとは言えないであろう。ただ、これら4、5回目のできるようになったもの(14語・文)の中では語が5語あったのに対し、文が9文とやや多かった(「部屋の冷蔵庫ですか」、「空港の免税店ですか」など)。これは、長い文なのでリピートのはじめのうちは文を間違えないで言うことで精一杯だったが、4、5回目ぐらいまで来てやっと文にも慣れて発音のほうも少しは意識されるようになったからかもしれない。

4.3 「し」と「ち」の問題に関する発音基準

実験終了後に「し」と「ち」の問題、ザ行の問題に関して、聞き取る際あるいは発音する際の基準などについて各学習者にインタビューした。ここでは、その発音基準と実験の結果の関係について見てみる。

「4.2 リピートの回数」で述べたように、自分で文字を読んで発音した0回目から、リピートをした5回目まで全て正しく発音できたものは49語・文あった。その中で大部分の41語・文が「し」と「ち」の問題に関するものであった。その中でも「し」と発音すべきものを正しく発音できたものは多かったが、「ち」と発音すべきものを正しく発音できたものはあまり多くなかった。

しかし、10人中2人だけ「し」と「ち」を両方とも比較的バランスよく正しく発音できていた学習者がいた。1人(以下、学習者A)は「し」3語・文、「ち」6語・文、もう1人(以下、学習者B)は「し」3語・文、「ち」2語・文正答だった。学習者A、Bは「し」と「ち」の言い分けについて、それぞれ『し』はɸ⁽⁴⁾ 100%だが、『ち』はɸ50%とɸ⁽⁵⁾ 50%でその中間ぐらい

(A)、『し』はs h、『ち』はc hだが、『し』の方には摩擦がある(B)と答えている。これに対し、「ち」を発音できなかった他の学習者は『し』はɸだが、『ち』はɸ、『し』は長いが、『ち』は短い、『し』も『ち』も同じ、『し』はs hで長いが、『ち』はc hで短いなどと答えている。

当然のことながら、『し』も『ち』も同じと答えた学習者は発音基準を持っていない、あるいは持っていないと言ってもいいかもしれない。また、基準自体は持っているものの、この二つの音の違いは長さではないことから、『し』は長いが、『ち』は短いと答えていた学習者は不適当な発音基準を持っていることになる。また、s hやc hのように英語に置き換えたとしても、そもそも英語の発音を正しくできているかどうかはわからない。さらに、単純にタイ語のɸ、ɸやɸ⁽⁶⁾に置き換えたとしてもタイ語の音素/c/の異音として、[c]や[tɕ]がある以上、必ずしも日本語の「し」や「ち」として正しく発音できるわけではない。つまり、あまりできなかった学習者

は不適当な発音基準を持っているあるいは発音基準を持てていないことになる。これは、誤った知識を持っていて、それに固執したためにリピートでなかなか発音がよくならなかったという結果（松崎 2002 : 37）と一致する。松崎（2002）は韻律に関しての結果であるが、単音でも同じことが言えそうである。

それに対し、学習者 B は [ɕ] に含まれる摩擦に言及しているし、学習者 A もタイ語に置き換えてはいるが、他の学習者と比較してやや複雑な基準を持っている。小河原（1996）でも比較的よく破擦音（「ざ」、「ぞ」、「つ」）を発音できる韓国人学習者が「口の中で舌の位置を変える」、「『ぞ』は『ず』から『ぞ』へ、『じょ』は『し』から『じょ』へ発音を移行させる」など不明瞭ではあっても独自の有効な発音基準を持っているのに対し、あまり発音できない群は「長短」という不適当な基準を持っていることが指摘されている（p. 19-21）。学習者 A、B も他の学習者より複雑な基準を持って発音していることが比較的よい結果につながったのかもしれない。ただし、10 人中 2 人と数が少ないことからさらなる検証が必要である。

4.4 ザ行の問題に関する発音基準

ザ行の問題に関する発音基準は以下のような回答があった。インタビューでは「さ」と「ざ」、「そ」と「ぞ」などについて尋ねたが、どれも同じだという回答だったのでここでは「さ」と「ざ」で代表させる。

「『さ』も『ざ』も同じ」、「『さ』は ㄹ⁽⁷⁾ で短い、『ざ』は ㄹ⁽⁸⁾ で長い」などという、「し」と「ち」の問題と同様に基準を持てていないあるいは「長短」という不適当な発音基準を持っている学習者もいた。しかし、ほとんどの学習者が「『さ』は普通、『ざ』は音が震える」、「『さ』は普通、『ざ』は音かのどから出てくる感じ」といった回答をしていた。この「ざ」に関する「音が震える」あるいは「音がのどから出る感じ」という発音基準は、「ざ」が持つ有声音の声帯振動の特徴を捉えているものと言える。しかし、本実験においてザ行の問題の発音を正しくできた学習者は少なかった。妥当な発音基準を持ていながら発音できなかったのはどうしてだろうか。

一つにはインタビューで述べられていた「『ざ』はのどから音が出る感じだが、時々音が出てくるのが間に合わないことがある」、「『ざ』はのどから音を出さないといけないのは知っているが、あまりできない」などの回答が示すように、発音基準は持ていても実際に発音する技術が充分ではないために正しく発音できないことが多かったのではないかということである。もう一つには、「『さ』は普通」という回答から無声音の「さ」はタイ語にもある ɕ⁽⁹⁾ や ɕ⁽¹⁰⁾ などのように普通に楽に発音することができる音声である。それに対し、のどを震えさせなければならない、あるいはのどから音を出さなければいけない「ざ」は苦勞しなければ発音できない音声であり、あまり発音に意識が回らない状態では発音しにくかったのではないかと考えられる。

インタビューの最後に「日本語の発音で難しい点はどこか」という質問もした。その際に、「し」

と「ち」の問題を挙げたのは 10 人中半分の 5 人であった。しかし、ザ行の問題を挙げたのは 10 人中わずか 2 割に過ぎない 2 人でしかなかった。さらに、3 人はザ行の発音は難しくないとまで回答している。だからと言って「難しくない」と回答した学習者が正しく発音できていたわけではない。この問題意識の薄さも正しく発音できなかった一因となっているかもしれない。

5. まとめ

5.1 授業への提言

本実験によって明らかになったのは以下のことである。

- ① 単純なリピートによって単音の発音がよくなることはほとんどない。
- ② 適当な発音基準を持つことが単音を正しく発音することに繋がる可能性がある
- ③ ただし、適当な発音基準を持っても、発音に意識が回っていない場合や発音に問題があるという意識が薄い場合は発音がよくなるしない。

以上の 3 点から、実際の授業へ提言できることは何があるだろうか。まず、①の結果から、学習者の発音を矯正したい場合に、単に教師がモデル発音を示して学習者に模倣させるだけでは充分ではない。仮にクラス全体で一斉にリピートをする場合であっても、「ここの発音はこうですよ」、「ここに気をつけてください」などと注意を喚起するだけでも、学習者の意識が発音にも向けられ、少しはよい発音ができるようになるであろう。これは③の結果とも関連している部分である。まずは、意識させなければならない。ただし、②の結果から、学習者もただ発音するだけではなく、適当な発音基準を持つことが重要だということになる。例えば、「し」と「ち」の問題について「長短」のような不適当な発音基準を持ったまま発音練習をしても発音はよくなるしない。いかにして学習者が適当な発音基準を持てるようになるか、その方法を考えていかなければならないだろう。

5.2 今後の課題

今回の実験はわずか 10 人の学習者の協力を得て行ったものであった。今後さらに人数を増やし、さらに主専攻や副専攻、民間の日本語学校の学習者ではどのような結果になるのかなどを検証していくことも必要となってくるであろう。また、今回は「し」と「ち」の問題、ザ行の問題という 2 点について実験を行ったが、これもタイ人学習者にとって苦手と思われる他の音声について実験する、あるいは逆に問題を絞って実験対象となる語を増やしてより深く考察する必要もあるであろう。

さらに、学習者が効果的に適当な発音基準を持てる具体的な指導方法を考えることも今後の課題としたい。

注

- (1) 「ヤマ」とは、「句頭のピッチ上昇から次の立て直しに至るまでの音調のカタマリ」(松崎 2001: 238) と定義されるものである。音調曲線が山の形になるもので、例えば「おはようございます」は「お」から「は」にかけて上昇し、そのまま高い状態が続き「ま」から「す」にかけて下降するので「ヤマーつ」という数え方をする。
- (2) サイアム大学での日本語教育は主に教養学部ホテル観光学科で行われており、学生は日本語・フランス語・中国語の中から一つを選択して勉強しなければならない必修選択科目である。
- (3) この教科書は、文法積み上げ形式の教科書で語彙にホテル・観光関係の用語が多く使われているのが特徴である。現在第1課から第25課までが使用されている。
- (4) 「ŋ」は[tɕʰ]と発音されるタイ文字の子音である。
- (5) 「ɲ」は[tɕ]と発音されるタイ文字の子音である。
- (6) 「ɲ̥」は[tɕʰ]と発音されるタイ文字の子音である。注(4)の「ŋ」とは声調が異なる。
- (7) 「ɤ」は[aʔ]と発音されるタイ文字の母音である。
- (8) 「ɤ̃」は[a:]と発音されるタイ文字の母音である。
- (9) 「s」は[s]と発音されるタイ文字の子音である。
- (10) 「s̥」は[s]と発音されるタイ文字の子音である。注(9)の「s」とは声調が異なる。

参考文献

- 石沢弘子・豊田宗周監修(1998)『みんなの日本語初級I本冊』、スリーエーネットワーク
- 大西晴彦(1976)「タイ人の発音に関する若干の考察」、『国際学友会日本語学校紀要』第1号
- 小河原義朗(1996)「韓国人日本語学習者の日本語破擦音の発音と聴き取りの関係について」、『東北大学文学部日本語学科論集 第6号』
- _____(1998)『外国人日本語学習者の発音学習における自己モニターの研究』、東北大学文学部博士学位論文
- _____(2001)「外国人日本語発音不安尺度作成の試み: タイ人大学生の場合」、『日本語教育論集 世界の日本語教育』 第11号、国際交流基金日本語国際センター
- 河野俊之・松崎寛(1998)「リピートだけでどれだけ発音がよくなるか」、『日本語教育学会秋季大会予稿集』
- シリラック・ダーンワニツチャクル(1987)「タイ語を母語とする学習者の問題点」、大坪一夫監修、『日本語の音声(1)』 アルク
- 助川泰彦(1993)「母語別に見た発音の傾向ーアンケート調査の結果からー」、『日本語音声と

- 日本語教育』(文部省重点領域研究報告書)
- 鈴木忍 (1963)「発音の指導と問題点ータイ語国民を中心にー」、『日本語教育』2号
- 千葉真人 (2000)「タイ人日本語学習者と日本人教師の意識の比較ー発音学習の視点からー」、
東北大学文学研究科 1999 年度修士学位論文
- ____ (2002)「タイ人日本語学習者が抱える発音学習上の問題点」、『バンコック日本語センター
紀要』 第5号、国際交流基金
- 東京外国語大学留学生日本語センター編著 (1994)『初級日本語』 凡人社
- 松崎寛 (2001)「日本語の音声教育」、『コンピュータ音声学』第5章 おうふう
- ____ (2002)「リピートのとき学習者は何を考えて発音しているのか」、『広島大学日本語
教育研究』12号
- ____ 河野俊之 (1998)『日本語教師・分野別マスターシリーズ 音声』 アルク
- 水谷修 (1987)「音声教育の問題点」、日本語教育学会編、『日本語教育事典縮刷版』大修館書店